様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月　７ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｈ０３５１０

研究課題名（和文）近世国家境界域「四つの口」における物資流通の比較考古学的研究

研究課題名（英文）Comparative Archaeological Study on Circulation in "Four Gates", Maginal Area of Early-Modern Japan

研究代表者
渡辺　芳郎（Watanabe, Yoshiro）

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授

研究者番号：１０２１０９６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近世における「四つの口」（松前・対馬・長崎・琉球）における物資流通について、考古学資料と文献史料から検討を加えた。その結果、以下の点が明らかになった。(1)「四つの口」における物資流通のあり方が、国内外の経済構造、流通構造とその変化と密接に結びついている。(2)「四つの口」における物資流通の関係は補完関係と競合関係という二面が存在する。(3)「四つの口」は交易の場でありながらも、同時にそこに居住する生活の場でもあり、各地における手工業生産の解明も重要な論点となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、これまで考古学資料と文献史料それぞれに検討をなされていた「四つの口」における物資流通について、その両面からのアプローチを総合的に行った点にある。また「四つの口」における物資流通の相互比較を通じて、それぞれの共通点と相違点とを抽出することで、近世における対外交易の特質を明らかにした。
また社会的意義として、いまだ「鎖国」のイメージが強い近世日本の対外関係を物資流通という「モノ」に基づいた検討を通じて、その具体的な姿を明らかにした点にある。

研究成果の概要（英文）：In this study, the distribution of goods in "Four Gates" (Matsumae, Tsushima, Nagasaki, Ryukyu) in early-modern times was investigated based on archaeological materials and historical documents. As a result, the following points were clarified. (1) The distribution of goods through the "Four Gates" is closely linked to changes in the domestic and international economic structures and distribution structures. (2) There are two aspects to the distribution of goods in the " Four Gates ": complementary relations and competitive relations. (3) " Four Gates " is not only a place of trade but also a place of living where people live, and elucidation of handicraft production in various places is also an important issue.

研究分野：考古学

キーワード：近世日本国家領域境　四つの口　物資流通

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近世日本において対外交渉の窓口である「四つの口」を通じてさまざまな人・物・情報が流通していたことは、これまでの「近世日本＝鎖国」という考え方を大きく変えてきている（荒野泰典他編 2010『近世的世界の成熟 (日本の対外関係)』など)。これらの地域における貿易活動については近年、近世考古学的な調査研究の進展によりその様相が明らかになりつつある。長崎では肥前磁器研究の進展によりその輸出のあり方が解明されるとともに、オランダ船とともに中国船の果たした役割が注目されつつある（大橋康二 2004『海を渡った陶磁器』、野上建紀 2010「一七世紀後半～一八世紀前半における肥前磁器のアメリカ大陸への流通」『交通史研究』72 など)。対馬についても、肥前や対州窯で焼かれた製品が、現在の韓国釜山に置かれた倭館を通じて朝鮮に輸出されていたことが判明している（家田淳一 2006「江戸中・後期 伊万里の朝鮮貿易」『日本海域歴史大系』5 巻)。琉球に関して清朝と冊封関係に基づく朝貢貿易により、大量の清朝磁器が流入し、肥前磁器が市場を席巻した本土地域とはかなり様相が異なることが指摘されている（新垣力 2010「沖縄から出土する 17～19 世紀の貿易陶磁器」『海の道と考古学』)。また 1609 年以後、琉球に対して強い支配力を持っていた薩摩藩においても琉球経由の物資流通が盛んであったことが知られている（橋口亘 1999「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究』19 など)。また沖縄・奄美と本土を結ぶトカラ列島が申請者らの調査により、清朝磁器が広く分布していることが確認されている（渡辺芳郎編 2015『近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究』鹿児島大学法文学部)。一方、北の松前についてはアイヌの生活の「内国化」が近世を通じて生じていたことが明らかにされている（関根達人 2014『中近世の蝦夷地と北方交易』)。また江戸は、近世の政治的中心地であるとともに物資流通の結節点の役割を果たしており、清朝製品の流通が考古学的に抽出されてきている（堀内秀樹 2010「近世都市江戸における貿易陶磁器の消費」『海の道と考古学』)。

申請者は平成 24～26 年度科学研究費（基盤 C)「近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究」において、琉球と松前という２つの国家境界域における物資流通の比較研究を実施した。その結果、二つの課題が抽出できた。一つは「国家／非国家」の違いにより物資流通の様相が大きく異なること、もう一つは考古学資料に見られる物資流通と文献史料に見られるそれとの間には齟齬、乖離があることである。

以上の研究状況を踏まえて、本研究では、「四つの口」における物資流通の具体相について考古学的資料を比較検討するとともに、「四つの口」における考古学資料と文献史料とを比較することで総合的な近世物資流通の具体相を明らかにする。

２．研究の目的

本研究の目的は次の３点である。

(1)近世日本の対外交渉地であり国家境界域である「四つの口」（長崎・対馬・琉球・松前）および消費地「江戸」における物資流通の具体相を、考古学的資料と文献史料から明らかにし、共通点と相違点を比較することで、近世日本の対外交易の全体的性格を明らかにする。

(2)「四つの口」における物資流通について、考古学とともに文献史的研究、美術史的研究を加え、相互に比較検討することで、多角的、立体的な復元研究を達成する。

(3)琉球口の経由地であるトカラ列島の発掘調査や奄美群島の陶磁器調査により、中国－沖縄－鹿児島(日本本土)をつなぐ物資流通に関する考古学的資料を収集し、より具体的な物資流通像を描く。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、「長崎口班（野上・木村)」「琉球口班（池田・深澤)」「松前口班（関根・菊池)」「対馬口班（片山)」「江戸班（堀口)」という研究体制をつくり、渡辺が統括する。渡辺はトカラ発掘調査、奄美群島の陶磁器調査も担当する。各班は、研究代表者と連絡を取りながら、それぞれの地域で調査研究を実施するとともに、年に１回の合同調査および研究会で報告、検討する。以上の成果を、最終成果報告書を通じて、社会的に還元する。

４．研究成果

本研究の成果については『近世国家境界域「四つの口」における物資流通の比較考古学的研究』2016～2020 年度科学研究費補助金（基盤研究（B)）研究成果報告書（課題番号：16H03510）(2021 年 3 月　総 166 頁　鹿児島大学法文学部）を刊行している。報告書は「報告編」と「論考編」よりなっており、以下、その内容をまとめる。

「報告編」には以下の 3 編を収録した。執筆はいずれも渡辺芳郎である。

第 3 章　十島村口之島「阿弥陀様」前庭部の発掘調査
第 4 章　奄美大熊大里遺跡出土陶磁器の調査
第 5 章　奄美大和村盛岡家伝来資料の調査

十島村（トカラ列島）口之島での発掘調査、かつて発掘調査された奄美市大熊大里遺跡出土陶磁器の再整理、奄美市奄美博物館保管の旧家伝来陶磁器の調査という３つの性格の異なるアプローチを試みた。その具体的様相は、これまで想定してきた近世南西諸島の陶磁器流通の三層構造と整合するものと考えられる。しかし遺跡から出土する陶磁器が基本的に廃棄されたものであるのに対し、伝来資料は保管されて伝来してきたものである。それゆえ両者には共通点もあるが、同時に考古学資料には見られない種類の陶磁器もしばしば含まれている。今後は考古学資料と伝来資料とを総合的に扱いながら、南西諸島における陶磁器流通のあり方を明らかにしていく必要があろう。

「論考編」には、以下の 10 編を収録した。

【松前口】

第６章 関根達人「「松前口」での手工業生産と「蝦夷土産」」

第７章 菊池勇夫「松前三港の「蔵敷」にみる移出入品」

【江戸】

第８章 堀内秀樹「江戸時代の貿易陶磁器需要 －江戸の状況を中心として－」

【長崎口】

第９章 野上建紀「長崎から輸出された肥前陶磁」

第 10 章 木村直樹「「長崎口」の輸出入 －抜荷・四つの口の関わりから」

第 11 章 山口美由紀「長崎出島の物資流通 －考古学資料を中心に－」

【対馬口】

第 12 章 片山まび「「対馬口」と日本人－草梁倭館船滄周辺遺跡出土遺物にみる対馬人の暮らし」

【琉球口】

第 13 章 渡辺芳郎「近世南西諸島における陶磁器流通の諸相－考古学資料と伝来資料から－」

第 14 章 池田榮史「近世琉球窯業の展開と対外関係」

第 15 章 深澤秋人「「琉球口」における流通統制の変容－「勝手商売」への移行と滞留商人－

「松前口」について関根論考（第 6 章）では、交易都市・消費都市として発展した松前における手工業について、文献と考古学資料から検討している。19 世紀の松前において、居住者への供給とともに、本土向けの「蝦夷土産」、アイヌ向けの漆器・金属製品の生産の可能性を指摘している。菊池論考（第 7 章）ではアイヌ交易に関与した場所請負人の帳簿類や松前の問屋関係文書を検討することで、松前三港で流通していた物品を抽出している。その結果、近世後期以降の蝦夷地が全国経済の産業構造の中に組み込まれていたことを明らかにするとともに、今後、考古学資料との照合の必要性を指摘している。

「長崎口」については野上論考（第 9 章）では、長崎を通じた肥前磁器輸出を、唐人貿易とオランダ貿易、後者をさらに会社による貿易と個人貿易にわけて、その内容と変遷を検討している。その結果、唐人貿易とオランダ貿易のうち会社による貿易は清の海禁政策下の 17 世紀後半に最盛期を迎えるが、個人貿易はむしろ 17 世紀末から 18 世紀前半に盛んになったとし、ヨーロッパをはじめとした世界各地の伝来資料や考古学資料がそれを裏づけることを指摘している。山口論考（第 11 章）はオランダ貿易の拠点である出島における長年の発掘調査成果に基づき、陶磁器と棹銅についての考古学的知見を整理、検討している。出島出土の陶磁器には、輸出用の肥前磁器、出島滞在のオランダ人が使用したヨーロッパ向け中国磁器と西洋陶磁器、生活用品あるいはコンテナとしての南中国や東南アジア産陶器類が見られ、出島特有の様相を示している。また近世後期の日本の最大輸出品である棹銅については、組頭部屋跡、銅蔵跡出土資料が、蘭館図に見られる棹銅取引の描写と整合することを指摘している。木村論考（第 10 章）は、オランダ貿易が本方・脇荷・誂・献上の 4 区分され、その中で陶磁器が脇荷として相当数輸出されたことを指摘しており、野上論考の見解と一致する。また資料的に限定されるものの抜け荷として摘発された輸出入品は、従来想定されていたような最高級品ではなく、むしろ一般的な物品が多い傾向を指摘している。

「対馬口」では、現在の韓国釜山に倭館が設置され、対馬藩と朝鮮との貿易の窓口となった。片山論考（第 12 章）は、これまで文献史的研究の蓄積のある倭館について、草梁倭館船滄周辺遺跡出土の遺物を検討することで、倭館滞在中の日本人の生活の復元を試みている。その中で、食文化の違いから食膳具の磁器や調理具（擂鉢）は日本製なのに対し、貯蔵具は朝鮮製の甕器が使用されていることは、倭館に限らず、外国の居留地の生活のあり方を考える上でも手がかりとなるであろう。また倭館窯における陶器生産も倭館の特徴として指摘する。

「琉球口」について、池田論考（第 14 章）では、中世～近世にかけての沖縄における窯業生産の歴史の中で、中国陶磁との関係、沖縄産陶器の技術系譜、その生産の指向性などを捉え、近世においても引き続き中国陶磁器（清朝磁器、宜興窯製品など）が大量に輸入されていることが指摘され、沖縄産陶器との間にランク差があった可能性を示している。深澤論考（第 15 章）は、近世において薩摩藩による強い統制があった沖縄の物資流通が、近代に移行した際にどのような変化を遂げたかを、同時期の公文書を精査することで明らかにしている。渡辺論考（第 13 章）は、近世南西諸島における陶磁器流通の三層構造を再確認するとともに、政治的アイテムとして

の陶磁器も含めて検討し、社会階層と密接に結びついた流通が形成されていたことを示した。
「四つの口」から輸入されたさまざまな物資の最大の消費地として江戸が挙げられる。堀内論考（第 8 章）は、出土貿易陶磁器の年代から、江戸における貿易陶磁の需要層の時代的変化を整理している。江戸前期における需要層は、幕藩体制が整備される過程で武家儀礼が規範化、制度化され、そのための大量の揃いの食膳具が必要とされた武家層であったとする。一方、江戸後期の貿易陶磁器の出土地が旗本や御家人、町人地が多くなり、特定の器種に偏ることから、中国趣味のトレンドを受け入れた人々であるとした。
総括として、各論での議論に基づいて、いくつかの論点を整理する。
(1)まず「四つの口」における物資流通のあり方が、国内外の経済構造、流通構造とその変化と密接に結びつき、どのように組み込まれているか、という論点である。このことは松前口における流通物資を検討した菊池論考において指摘され、また近世後期の主要な輸出物資であった棹銅については、その原料(銅)の採掘から製作、運輸に関わる「銅の道」の解明の必要性が指摘されている(山口論考)。手工業生産に王府の統制が強かった琉球（池田論考)、また運送を強く統制した薩摩藩による物資流通（深澤論考、渡辺論考）は、政治権力による経済政策とその変化と深く結びついている。さらに需要およびそれを担う社会集団の変化は、輸入品の内容に影響を与えている（堀内論考)。
(2)つぎに「四つの口」の相互比較という論点である。長崎口の輸出入において、唐船とオランダ船の間にその内容に大きな差異はなく、さらにそれぞれの口において物資の共通性が見られる。このことは流通構造の発達した近世後期において、「長崎口」と「琉球口」の競合関係を生み出している（木村論考)。一方、「長崎口」におけるヨーロッパ製品（山口論考）や「松前口」の「蝦夷土産」(関根論考）などの独自性も見られる。同じ肥前磁器の海外輸出において「四つの口」間での共通点と相違点の比較の必要性が指摘されている（野上論考)。「四つの口」における物資流通の関係は補完関係と競合関係の二面から考えていく必要がある。
(3)「四つの口」は交易の場でありながらも、同時にそこに居住する生活の場でもあり、各地における手工業生産の解明も重要な論点となる。「松前口」においては 19 世紀に入ると手工業者の増大が認められ、蝦夷地警護を命じられた松前藩の性格の変化との関係が指摘されている（関根論考)。また「対馬口」の倭館では、日本における茶の湯需要に応じて倭館窯が設置され、陶器生産が行われている（片山論考)。一方、長崎出島や倭館では、滞在者の生活用品として国外からの輸入品（出島：ヨーロッパ陶磁器など。倭館：甕器など）が重要な役割を果たした点も、交易地としての特色と言えよう。各地における手工業生産の解明も重要な論点となる。

なお本報告書は鹿児島大学リポジトリで PDF 版が公開されている。
http://hdl.handle.net/10232/00031738

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計32件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 池田榮史	４．巻 2
２．論文標題 琉球列島史を掘り起こす－11～14世紀の移住・交易と社会変容－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 中世学研究	６．最初と最後の頁 13-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 関根達人	４．巻 7
２．論文標題 北海道松前町福山城下町遺跡小松前町地点発掘調査報告	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人文社会科学論叢	６．最初と最後の頁 61-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 関根達人	４．巻 737
２．論文標題 松前城下出土のガラス玉	５．発行年 2019年
３．雑誌名 考古学ジャーナル	６．最初と最後の頁 16-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 片山まび	４．巻 -
２．論文標題 茶碗からみる朝日交流ー粉青沙器様式から倭館窯までー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 朝鮮陶磁、肥前の色をまとう	６．最初と最後の頁 182-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菊池勇夫	4．巻 1
2．論文標題 蝦夷地行き輸送船とその乗組員―高田屋金兵衛の手船・雇船を例に―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 北の歴史から	6．最初と最後の頁 63-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菊池勇夫	4．巻 2
2．論文標題 松前・蝦夷地の廻船と懸り澗―澗（マ）・泊（トマリ）地名―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 北の歴史から	6．最初と最後の頁 27-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 WATANABE Yoshiro	4．巻 -
2．論文標題 Ceramic Distribution in the Tokara Islands in the Early Modern Period	5．発行年 2020年
3．雑誌名 The Tokara Islands：Culture, Society, Industry and Nature	6．最初と最後の頁 9-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺芳郎	4．巻 -
2．論文標題 奄美大和村津名久焼の基礎的研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 奄美群島の歴史･文化･社会的多様性	6．最初と最後の頁 70-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村直樹	４．巻 91
２．論文標題 幕府の「鎖国」政策とその実態	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史地理教育	６．最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 羅東旭・片山まび	４．巻 24
２．論文標題 草梁倭館船滄跡周辺出土遺物に関する調査概要	５．発行年 2018年
３．雑誌名 博物館研究論集	６．最初と最後の頁 137－186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 渡辺芳郎	４．巻 9
２．論文標題 近世薩摩焼・象嵌陶器の基礎的研究	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中近世陶磁器の考古学	６．最初と最後の頁 275-304
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺芳郎	４．巻 1
２．論文標題 考古学が明らかにする薩摩焼の歴史	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大学的鹿児島ガイド－こだわりの歩き方－	６．最初と最後の頁 199-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関根達人・木戸奈央子	4．巻 8
2．論文標題 越後産焼酎徳利（「松前徳利」）の生産と流通	5．発行年 2018年
3．雑誌名 中近世陶磁器の考古学	6．最初と最後の頁 245-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関根達人	4．巻 13
2．論文標題 アイヌ文化を特徴づけるモノ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 民衆史の遺産	6．最初と最後の頁 746-779
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関根達人・佐藤雄生	4．巻 1
2．論文標題 北前船で運ばれた色絵の器－北海道・東北地方出土の色絵磁器－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東北・北海道に渡った九谷焼	6．最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野上建紀、エラディオ・テレロス・エスピノサ	4．巻 5
2．論文標題 アルゼンチン・チリに渡った東洋磁器	5．発行年 2019年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 75-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野上建紀	4．巻 1
2．論文標題 陶磁考古学と長崎	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大学的長崎ガイドーこだわりの歩き方	6．最初と最後の頁 195-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 深澤秋人	4．巻 31
2．論文標題 廃藩置県に関する通知―鹿児島琉球館への伝達をめぐって―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 黎明館調査研究報告	6．最初と最後の頁 35-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菊池勇夫	4．巻 52
2．論文標題 松前藩の上乗・目付について―17・18世紀におけるアイヌ交易	5．発行年 2019年
3．雑誌名 宮城学院女子大学付属キリスト教文化研究所研究紀要	6．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野上建紀	4．巻 4
2．論文標題 陶磁器からみる長崎と海外とのモノ交流－肥前磁器と「唐人」、「唐船」の関わりについて－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 141-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 片山まび	４．巻 1
２．論文標題 高麗・朝鮮陶磁器の概要ー14世紀中葉から17世紀初を中心に―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 第15回 山陰中世土器検討会資料集　山陰における高麗・朝鮮陶磁	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 池田榮史	４．巻 37
２．論文標題 琉球列島出土の滑石製石鍋破片について	５．発行年 2017年
３．雑誌名 琉球大学法文学部人間科学科紀要　人間科学	６．最初と最後の頁 169-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 池田榮史	４．巻 19
２．論文標題 沖縄における窯業史研究の到達点と課題―窯業開始期を中心に―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 那覇市立壺屋焼物博物館紀要	６．最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺芳郎	４．巻 19
２．論文標題 薩摩焼陶工は琉球にどのような製陶技術を伝えたか？	５．発行年 2018年
３．雑誌名 那覇市立壺屋焼物博物館紀要	６．最初と最後の頁 33-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木村直樹	4．巻 96
2．論文標題 長崎聞役成立以前の商人	5．発行年 2018年
3．雑誌名 桜文論叢	6．最初と最後の頁 101-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関根達人	4．巻 4
2．論文標題 安政の開港と出土陶磁器－なぜコンプラ瓶は北海道から出土するのか－	5．発行年 2016年
3．雑誌名 中近世陶磁器の考古学	6．最初と最後の頁 163-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 深澤秋人	4．巻 216
2．論文標題 鹿児島琉球館における「役所」の機能―尚家文書三四一号を中心に―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 国史学	6．最初と最後の頁 75-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺芳郎	4．巻 68
2．論文標題 政治的アイテムとしての近世陶磁器の生産と流通－薩摩藩を中心に－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 鹿大史学	6．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 関根達人・木戸奈央	4．巻 12
2．論文標題 サハリン出土の越後産焼酎徳利（「松前徳利」）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中近世陶磁器の考古学	6．最初と最後の頁 131-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 関根達人	4．巻 9
2．論文標題 近世奄美における墓石の受容－沖永良部島と徳之島の比較から－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 人文社会科学論叢	6．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野上建紀	4．巻 911
2．論文標題 もう一つの東西文化交流路－マニラ・ガレオン貿易	5．発行年 2020年
3．雑誌名 歴史地理教育	6．最初と最後の頁 22-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野上建紀	4．巻 79(3)
2．論文標題 長崎輸出の金襴手伊万里の生産と流通について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東洋史研究	6．最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 関根達人
2．発表標題 松前口の考古学的研究
3．学会等名 日本考古学協会第85回総会研究発表会
4．発表年 2019年

1．発表者名 関根達人
2．発表標題 北海道島における陶磁器流通-12世紀～19世紀-
3．学会等名 東洋陶磁学会第47回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 渡辺芳郎
2．発表標題 近世日本の「四つの口」－琉球口と薩摩を中心に－
3．学会等名 令和元年度 長崎県考古学会秋季大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 野上建紀
2．発表標題 「出島」から伝わった肥前陶磁
3．学会等名 令和元年度 長崎県考古学会秋季大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 片山まび
２．発表標題 草梁倭館内の日本人の暮らし
３．学会等名 土のなかから発見した釜山の歴史（釜山博物館）
４．発表年 2019年

１．発表者名 木村直樹
２．発表標題 九州諸藩から見る「長崎・出島」
３．学会等名 令和元年度 長崎県考古学会秋季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡辺芳郎
２．発表標題 近世陶磁器からみた九州と南西諸島
３．学会等名 シンポジウム：九州-沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡辺芳郎
２．発表標題 薩摩焼研究の現状と課題
３．学会等名 東洋陶磁学会第46回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 関根達人
２．発表標題 アイヌ民族と酒－漆器>陶磁器の価値観－
３．学会等名 「近世考古学の提唱」50周年記念「近世の酒と宴」研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 深澤秋人
２．発表標題 渡唐銀の那覇搬送をめぐる船とヒト－御銀船と御銀宰領について－
３．学会等名 琉球・沖縄歴史研究会３月例会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 渡辺芳郎	４．発行年 2018年
２．出版社 北斗書房	５．総ページ数 80
３．書名 近世トカラの物資流通－陶磁器考古学からのアプローチ－	

１．著者名 木村直樹・牧原成征編	４．発行年 2018年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 285(1-47)
３．書名 十七世紀日本の秩序形成	

１．著者名 長崎大学多文化社会学部編・木村直樹責任編集	４．発行年 2018年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 320(217 –232・271－284)
３．書名 大学的長崎ガイド	

１．著者名 関根達人	４．発行年 2016年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 194
３．書名 モノから見たアイヌ文化史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	関根　達人 (Sekine Tatsuhito) (00241505)	弘前大学・人文社会科学部・教授 (11101)	
研究分担者	菊池　勇夫 (Kikuchi Isao) (20186191)	宮城学院女子大学・付置研究所・研究員 (31307)	
研究分担者	堀内　秀樹 (Horiuchi Hideki) (30173628)	東京大学・キャンパス計画室・准教授 (12601)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	池田　栄史 (Ikeda Yoshifumi) (40150627)	琉球大学・国際地域創造学部・教授 (18001)	
研究分担者	木村　直樹 (Kimura Naoki) (40323662)	長崎大学・多文化社会学部・教授 (17301)	
研究分担者	深澤　秋人 (Fukazawa Akito) (50612785)	沖縄国際大学・総合文化学部・教授 (38001)	
研究分担者	野上　建紀 (Nogami Takenori) (60722030)	長崎大学・多文化社会学部・教授 (17301)	
研究分担者	片山　まび (Katayama Mabi) (80393312)	東京藝術大学・美術学部・教授 (12606)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関